　　　　　　通信第８２号　（光を和らげて、塵に同ず）

明けましてお芽出とうございます。

旧年も大変お世話になり、ご支援、お育てを賜りまして誠に有難うございました。

浄土の世界の明るい新しいの芽が出て日々の生活の中で大満足を見出し共々に浄土へ向かって歩ませられることを切に願っております。今年もなお一層のお育ての事、よろしくお願い申し上げます。

昨年は内も外も心の世界につき、国際情勢につき激動の年でありました。不安と苦悩にあえぐ姿がテレビにうつしだされる場面が多くありました。十二月十一日の毎日新聞に「日本の大人の学力は世界の三十一か国中トップ級である。しかし、生活での満足度は最下位（国際成人力調査）である」とありました。私を含めて宗教を軽んじて来たことと無関係ではないような気がいたしました。

さて、我が家のお内仏の上には平成十二（二〇〇一）年に大石先生がごうされた「和光同塵」という額が掛かっています。長年私の課題でありながら二十四年間が過ぎました。書いて頂いた当時、私は勇ましく自分を主張していましたので、先生から「すぐ江本さんはをふる」と注意されました。そういう中でしたから何か頭を張られたようで面白くない気がしたのを覚えています。

　その後すぐに出典の「老子」の場所をコピーされ、赤ペン「」と線を引いて手紙を下さいました。先生とお遇いして六年が経ったころです。それから二十四年間が過ぎました。先生と出遇ってから今年で三十年です。最近ようやく先生のお心に出遇えた気がしております。

　十二月十四日十五日は三重県の松林寺さまの報恩講のご縁を頂きました。何か新しい世界の胎動と不安を感じつつ、親鸞さまの直接にお書きになられた「教行信証」のお教えを聞かせて頂こうと思い立ち、藤谷秀道先生の「教行信証の道標」の本をカバンに入れて出かけて行きました。

　浄土の世界は三界（一欲界、二色界、三無色界。生まれ変わり死に変わりして流転する迷いの有情の境界）を超えている。私どもは仕事、子育て、勉強を一生懸命やっているはずが三界の中でしているのです。さらに私においては教学や信心、念仏さえも三界の中で何の疑問も持たずにしがみ付いて来たのです。よく卵の殻が割れるお譬えを使って信心の誕生を説かれて来ました。卵の中のひなが育って、もうこれ以上殻の中におれなくなり内から殻をつつく、親鳥も察知して殻の外からつつく、ひびが入り殻が破れる、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏の声が上がるのであります。信の一念、行の一念といわれる時であります。そこを頭で理解していても実地の歩みの中で体験していないと味わいは出てきません。そこを済んだこととできないで苦悩する人は宿善の強い人です。藤谷先生は素質があるとの仰せでした。殻の破られるのに長い求道の苦闘があります。機が熟する期間が必要なのです。

松林寺さんでの初日の夜は朝の一時ころまで信心の溝さらへといわれる白熱した談合が森はる美さん、田中秀法さん、森愚英さん、法喜さんそして私の五人でかわされました。泊まり込みの聞法のご利益です。その晩は朝まで珍しく眠れませんでした。

翌日昼からの最後のご満座の席でした。不安や苦悩のである無明の闇は三界のにある。三界の世界が卵の殻の中であり、その三界のに目覚めさせた本願の光がある。大石先生は身を粉にして三界の外から、呼びかけ招き導いて下さっていたご恩と心に言葉が出た時、突然にこみ上げて言葉が詰まりました。後ろを向いて涙しながら白板に「ご恩」という字を書かされました。

それによって、私においての尊い報恩講となったのであります。大満足の心が沸きあがって来ました。寺も儀式も教学も大安心（大信心）を頂くために在ることを深く知らされたことでありました。

　その日は大阪のホテルに泊り、翌日次男の道人君と昼食を三人で頂きました。こうして落ち着いて食事ができることは大石先生、ご本願のお陰としみじみ感じさせられたおいしい食事でありました。

　帰りの新幹線の中で藤谷先生の本を開きました。釈尊のたる相を仰ぎ見て阿難尊者が問いを起こすところです。

　　『大無量寿』の正しきは阿難である。阿難は釈尊ので多聞第一でしかも資質温

　　順であった。ただ一つ悲しいことは、未離欲で煩悩が多かったために証悟が開けていなかった。それで釈尊はいつでもこの阿難のことがかりであった。なんとかして、阿難を自分のりの境地にまで、引き上げようと心を砕いておられたが、どうしてもそれを果遂することが出来なかった。

　　　ところがある日、釈尊は思われた。阿難は資質純真たるがゆえに、心に思った欲望をすぐ行為に移す。そこにいつも間違いを起こすが、ただし自分はすぐ実行には移さないが、やはり阿難と同じ欲望を、心の底のどこかに持っている。今までは、釈尊は阿難を自分の地位にまで引き上げることばかりに苦労しておられたが、今日初めて、引き上げるのではなくて、仏が阿難の地位に下がって考えられた。自分もやはり阿難と同じではないか。この事がわかった時に、これをわからせた大きな「光」があることに気が付かれた。そういう光ならば、自分もほんとうに救われるがあの阿難も同様に救われねばならぬ。今日こそ阿難の救わるる真実の道が明らかとなったので、釈尊の威容は常に異なって、顯曜として輝いたのであります。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　６６頁

　釈尊と阿難がちがったまま一つの世界であります。

「和光同塵」、「還相廻向」、「法蔵魂」、「自利利他」。思わず本に赤ペンで書かされました。本願の

光、大石先生の願いがようやく届いた感じがいたしました。「教行信証」の真実『大無量寿経』の

真実の光が差し込んで下さったことであります。また新世界への一歩であります。停滞なく不退

転の歩みが事件や不安や苦悩をご縁として、仏智に転じられて進むのであります。

　最後に二人のお同行さんのお便りを紹介させて頂きます。最初に、ご門徒でもあり、小学生の

時にお世話になった先生です。

　　先日、寺報と通信を拝受いたしました。

　　拝読しているとぽかぽかしたものが心に伝わってくるのです。

両院様のご熱意にお応えしたい。の行き末を安らかにしたいと

念ずるばかりであります。

色々なお経を上げさせて頂いておりますが「阿弥陀経」はあまりひっかからないようになりました。如来様に救われたいと考えています。称名も口からでてきますがみな自力であります。いつも有難いお便り嬉しゅうございます。

両院様のご健康を念じつつ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中津市　久保英一先生

　　前略・・長仁寺のご様子、海外での様子。日本各地の熱心な御同行の方々の事等、この末法

と言われている今日でも真宗の教えを行じている方々がおられ嬉しいです。たくさんの様のお陰ですね。皆々様の不思議なご縁で新住職様、坊守様も仏様にご縁の方で良かったです。

法喜様もご立派に役目をはたされておいでですね。知り合いのお寺は旧坊守と新坊守の考えが合わず悩んでおられます。

　如来さまからお預かりしたこの身体も、あちこち冷えで苦しんでいても通信を読むことで楽になるようです。

向寒の折、御法体大切に

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　愛知県常滑市　伊藤　喜和

令和七年元旦

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝